

第3回富津地区地域の支えあいの体制づくり会議 会議録

日時：令和3年3月2日(火)13時30分～15時20分
場所：ZOOM・富津市役所4階401会議室

1 開 会

2 介護福祉課長あいさつ

3 富津地区の目指す姿と課題の設定について（今までの会議のふり返り）

別紙「富津市の地域包括ケア会議デザイン」に沿って、事務局が説明（10分）

4 ZOOMによりリモートで発表

発表者：訪問看護ステーション花くじら 三辻 暁美 様

別紙「この町でまあまあよかったプロジェクト」及び動画を元に発表。詳細は下記のとおり。

（1）花くじらの概要

- 令和3年1月に昔の竹内医院の場所をお借りして、訪問看護ステーションと暮らしの保健室を立ち上げた。

（2）訪問看護について

- 訪問看護では、「在宅療養のお世話」「介護予防」「床ずれ予防・処置」等の業務を行っている。
- 看護師は、患者が自分で自分のことができるという、セルフケアの概念を打ち出している。患者は何らかの障がいでセルフケアができなくなってしまっているため、どうしたらセルフケアができるようになるかを考えながら、看護が関わっている。
- 次のとおり、訪問看護の一例を紹介したい。
 - 70代女性。外に出られずうつ状態の方。
 - 家族は、リハビリを通して外に出られるようにしてほしいという希望だった。
 - 当初は散歩や運動を考えていたが、本人から本人が料理を作ってもらう人に来てほしいと意見があった。その際、家政婦を頼むではなく、ケアマネが料理を通して

リハビリができないかと提案した。提案に沿って（看護師が）リハビリをすることで、女性は料理の材料を買うために出掛けられるようになった。

（3）花くじらの特色・考え方

- 花くじらには、看護師だけでなく作業療法士もいる。
- 作業療法士は、こころの動きをくみ取りながらリハビリをしていく。作業療法士が大事にしているのは、「心が動けば体が動く」ということ。認知症の方のリハビリにも有用と考える。
- 花くじらは、訪問看護を中心に、自分で自分の生き方・生活を選択し、自分であり続けることを大事にしたいと思う。
- 富津市では、人口が減り、資源が少ない。わがままに生きるのは難しいかということ、花くじらは常に考えている。
- たとえば、がん末期の方がおかゆなら食べられると言うのでレトルトのおかゆを買ってきたが、これはおいしくないと言ったとする。これは自分勝手ではなく、我が思い・我がままではないかと三辻さんは考えている。
- わがままというのは、自分の思いを大切にしていることを伝えること。手作りのおかゆを今すぐつくれと言うのは自分勝手になってしまうかもしれない。しかし、相手の都合も確認しながら、手作りのおかゆがどうしたら食べられるかという形で対応していくのが大事である。
- 我がままを口にできるまちにしたいというのが、花くじらの願い。

（4）団体等の紹介

- 「NPO法人認知症フレンドリーシップ」
 - 団体のビジョンは「認知症の人と一緒に、誰もが暮らしやすい地域を創る」というもの。
 - たとえば、ATMの操作ができずにお金が下せないで自宅で暮らすことができないケースがあったとする。その場合、認知症の方でも操作できるATMがあれば、地域で暮らせるのではないか、という発想の団体。
 - 「それぞれの違いを認め合いながら、自分のできることを活かしあえる町」が支えあいの町になるのではと花くじらは考えている。
- 岡田美智男氏著、医学書院出版の『弱いロボット』という書籍
- 弱いロボットは、自分が苦手なことや不完全なことを隠さずに適度に開示するこ

とで、周りの人の「強みや優しさ」を上手く引き出す。

- 動画にて、ロボットが床に落ちている缶を拾うことができないが、周りに「モコモコ」と呼び掛けることで周りがゴミを拾ってくれた部分を紹介。こうしたやりとりを通して、ロボットと人との関係性がつくられていく。
- たとえば、人がハサミを使うことで紙を切れるように、人ができることとできないこと、物ができることとできないことがある。これらをコラボすることで、お互いの強みと弱みを出し合う環境をつくっていきたいという思いで、花くじらは動いている。

(4) 花くじらの具体的な活動

- 花くじらの具体的な活動の一つに「暮らしの保健室」がある。
- (モデルは)秋山正子氏という訪問看護師が、新宿で立ち上げた暮らしの保健室。そこは、みんなが気軽に入れる敷居の低い場所。看護師等の専門家が在籍し、話をするうちに困りごとを自分で整理し、できそうな解決策を探せるようなサポートを展開している。
- 暮らしの保健室には資料のとおり6つの機能があるが、特にボランティアの育成の場が大事。相談に来ていた方が自分の力をつけて(利用者から)ボランティア側に回ってほしい。

(5) 三辻様からの呼びかけ

- 令和3年1月から始めたばかりなので、皆さんに来てもらい、居場所づくりをしていきたい。
- 富津の、認知症の方にとって「暮らしやすいところ」「暮らしにくいところ」について、皆さんの目線から意見を教えてほしい。

<三辻様への質疑応答>

Q) 花くじらの発表に関する資料がほしい。

A) 事務局から印刷して送付する。

Q) サロンとして(花くじらを)利用しても良いか。

A) 構わない。

Q) 区長がサロンのような形で(花くじらを)使っても良いと周知したら、利用率が上がるかもしれない。今は事業所としてしか理解されていない。

A) 自分たちが立ち寄れる場所として、周知していきたい。

5 グループワーク

趣旨説明：富津地区生活支援コーディネーター 佐久間 勇 様

- コロナ禍において集まることができず、昨年から一度も区長さんと話ができいていない。
- 各地区の状況を知っているのは区長さん方である。
- 区長と話し合いをし、自分たちの区の高齢者や困っている人たちの情報を共有する。そのうえで、各地区には民生委員やふれあい推進員もいらっしゃるなので、地域でどんな支えあいができるのかという話をどんどんしていきたいと思っていた。
- 佐久間氏が実践するいどぼたの集いのような集まりを、富津地区へ拡げていただくために、投げかけたい。
- 会えない状況でも意思の共有が必要。できるうちに体制をつくる必要があるので、地域の支えあいの中でどんなことができるのかを一步ずつ進めたい。
- ZOOMでも情報共有ができるということで、今回の会議を設定した。

※グループワークで出していただいた意見等は、別紙「グループワークまとめ」のとおり。

6 その他（事務局から連絡）

- 本会議のアンケートに協力していただきたい。
- 本日の会議録については、後日発送する。今後の会議の進め方については、関係機関で協議し、お知らせする。
- その後、企画課からタクシー券と移動手段確保等支援事業の補助金に関するアナウンスあり。

7 閉 会